OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

無の存在（一）

高階順治

内容

一 無の存在の問題
二 無の意義
三 無の解釋の歴史的瞥見
四 絶對的無
五 有によつての無の顯示
六 絶對的無即現實性
七 現實性と可能性・必然性

一

「一切のものは、矛盾するものから矛盾するものが成る、といふ如くに生成する」といふプラトンの洞觀と、「生成は存在と非存在との中間に在り」、「生成されるものが生成され終へた時に、それは存在するものとなる」とい

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ふアリストテレスの解釋とを根據として、「凡て矛盾するものが矛盾するものゝ存在を可能ならしめる」といふ、存在の矛盾性の原理が確立され得るとするならば（本誌第九卷第三・四號特輯「記念論文集」內拙稿「存在の矛盾性」參照）、一般に存在はその矛盾者たる非存在によつてその存在が可能であり、また非存在は非非存在即ち存在によつて初めて非存在としての存在性を贏ち得ることが、當然にもいはれ得るであらう。存在するものは一般に、その自然現象・文化現象・精神現象・生命現象の何れたるとを問はず、否、むしろこれらの何れをもすべて包括してこれを有 Sein と名づけることができる（本誌第七卷第四號拙稿「生命・意識・價値・物質の四存在領域について」參照）。それに對するとき非存在は無 Nichts といへるであらう。註 隨つて右の原理は「無が有の存在を可能ならしめる」とも「有が無の存在を可能ならしめる」ともいひ得られるであらう。かくて無は常に有の根柢にある領域的存在として、有を有たらしめてゐる非存在であり、また反對に有は常に無の根據として、無を無たらしめてゐる存在であることが明かである。有るものゝ存在については何人と雖もこれに對して疑ひを抱くことはないであらう。けれども無いものが存在するといふ言ひ方は、それ自身矛盾するものとして、普通の人々に疑惑を惹起せしむるに充分であらう。隨つて我々は先づこの無の存在が何を意味してゐるか、そしてまたそれが如何にして可能であるかを最初に考察して見なければならぬ。

註　無 Nichts と非有我は非存在 Nichtsein とは、嚴密な意味では勿論同一とはいひ得ぬであらう。例へばコーエンなどは非 Nicht と無 Nichts 即ち μὴ と οὐ とを嚴密に區別してゐる。併し我々は今はこの區別に深入りすることをしな

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

いで置く。只、無といふときは非存在も一つの存在であると考へられた意味であり、非存在といふとき、それは存在の單なる論理學的否定を意味するといふ如き區別をのみ今こゝに假に認めて置かうと思ふ。

無が存在するといふ時、我々は闇が光るといふ時の如き一種の矛盾を感ずる。無は非存在であるが故に、それは固々存在してゐないことをその本質としてゐるのではないか。若しそれが存在するとせば、即ち存在といふ形態をとるものとすれば、それは既に有であつて無ではないのではないか。それ故に無の存在を問ふことは恰も暗い光を求めるが如きものではないか。ましてその無についてその存在性の考究をなさんとする如きは、恰もランプを以て闇を探し求めんとする類ひではないか。併しながら、無の存在を問ふことは、我々にとつて決して暗い光を問ふことほどに無意義なものではない。何故ならば、我々の問題にするのは、暗い光ではなくして暗さに於ける光であり、またそれ故に、光る闇ではなくして、光の中の闇を、謂はゞ、光あることによつてのみその存在の可能である闇の如き無そのものゝ存在を、問ふことにあるからである。光が感能に與へられない場合には、カント[註]もいへる如く、暗黑も亦決して表象されることはない。暗黑が表象され思惟される以上、それは必ず光の中のそれでなければならぬ。有が有として存在するためには、それに矛盾する無が、また無が無として存在するためには、有が、各々その根柢的・領域的存在として存在してゐなければならぬ。有と無とは相互相即に於て、初めて各その存在性を確立し得るのである。即ち一切の有はそれ自ら必ず無を負ひ、有は無と結合することによつてのみ、初めてその存在が可能となるのである。それは恰も、生の存在が死と結合することによつてのみ、また

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

死の存在は生けるものの死たることによつてのみ、存在が可能であり、死無き生や生無き死は、神の生や無生物の死の如く、生または死としての存在が不可能であることの理と同じである。存在の矛盾性とは、まさしくかゝる事態を意味せるものに外ならなかつた。

註　Kant: Kritik der reinen Vernunft, S. 349.

さて然らば、かくの如く有の存在を可能ならしめてゐる無そのものゝ存在は如何にして保證し確保し得られるであらうか。勿論我々はこの存在を形式論理學的に證明するなどのことはできない。何故ならば形式論理學の適用できる範圍は無ならざる有にあり、而もその有の中の時・空・因果的事實の世界に於てのみ存在するものであつて、それ以外には存在し得ぬものだからである。無の世界はかゝる事實的世界の一層奥深きところに、それを超越して打ち潜める存在である。それ故にハイデッガーもいへる如く、無及び存在に關する問題領域に於ては、悟性の力が破壞し去られてしまふのである。併しながら固より悟性による形式論理學的方法のみが學の方法であるのではない。それは嚴密性を特質とする個々の自然科學に對してこそ必要にして充分なる學的方法となるのではあるが、嚴肅性を尊ぶ哲學、殊に即存在的なる基礎的存在學にとつては、それは最早如何なる用にも立たぬものである。然らば無の解明にとつて一體他の如何なる學的方法がそれに恰適するものであらうか。我々はこゝに、辯證法的方法を擧示しなければならぬであらう。即ち「矛盾するものが矛盾するものゝ存在を可能ならしめる」といふこの原理を確乎不動のものとする、即存在的特殊の方法がそれである。無の世界を一つの存在の世界とし

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

て、有の世界と同様に、學の領域にまで持ち來すための、謂はゞ前作業も、かゝる特殊の方法によつてなされなければならぬ。

無の存在については、ベルグソンも適切に道破せる如く、今までの哲學者は殆どこれを重大視してゐなかつた。それにも拘はらず無の觀念は哲學的思索の隱れたる活力素であり、見えざる原動力であることが多かつた。人々が哲學的反省を始めたその當初から、意識の面前に困難なる問題を提供し、我々を困惑懊惱せしめたものもまさしくこの無の觀念であつた。註 然るに世には無は非存在であり、空であり、虛無であるが故に、その存在は全く思惟し得られず、隨つて無についての如何なる論究も言表も我々には全く不可能であり、且つ不必要であると說くものがある。手近き一例を擧げるならば先づフォイエルバツハの如きである。彼によれば「無は絕對的無思想・無理性的なものである。無は全く思惟され得ない」。「無が思惟されるとしたら、それは規定され、從つてこれはもはや無ではなくなる」。「無は絕對的自己欺瞞、太初の僞り πρώτον ψεῦδος それ自身に於ける絕對的虛僞である。無の思惟は、それ自身を反駁する思惟である。無を思惟する者は、即ち思惟しないものである。無は思惟の否定である。」「無こそは絕對に無理性的なもの」「根柢なきもの、役に立たないもの、あれ又はこれといふ一定したものでないもの、合理的でないもの、その他そういふものを、手短かに氣取つて云ひ現はしたものに過ぎない。」「無は思辨的空想の幽靈でなくて何であらう。」(一) 無の存在は全く無目的であり、無意味であり、理解し得ぬものである。無の存在の無意味といふことの中に、無の存在の眞の意味が見出される、とするのである。併しながら我

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

々の見を以てすれば、かくの如く無についての問ひの無意味を信じ且つその不可能を說く者は、全く悟性的形式論理學の立場にのみ蹈躇する者であり、それはまさしく自ら「哲學は再び自然科學に結びつかねばならず、自然科學は哲學に結びつかねばならぬ」(二)と說くところの自然科學的唯物論といふ全く暗く沈默せる立場にのみ固執する者である。かくの如き唯物論的立場は、存在の存在性そのものへ端的に突き入つて即存在的にその本質を把握しようとする我々の立場から見る時は、全く問題の根本を忘れて末梢問題にのみ齷齪たる如き感なきを得ない。何故ならば、嚴肅性を念とする存在學そのものは、ハイデッガーも說く如く「原則的にまた明確に、そしてまた獨り事態そのものにのみ、最初にしてまた最後の言葉を與へることに存してゐ、かく事態性に即して問ひ、規定し、基礎づけることの中に、存在者それ自身の許への服從が實行し得られる」(三)からである。然るに「事態そのものへ」なるこの態度を持して存在の存在性を觀ずる時、有は無により、無は有によつてのみ初めてそれらの存在の可能であることが明かであつた。それ故にこそ、「若しも學が無を眞面目に考へないならば、その學の誤れる冷靜さと卓越さとは笑ふべきものとなる」(四)より外に仕方がない。かくて一切の學術が、無をも亦問題となすところの存在の存在性の學を、即ち第一哲學としての形而上學をその前提とし、それによつて根據づけられることがなかつたならば、それは全く沙上の樓閣たるものに過ぎぬことゝなるであらう。ましてそれが偏窟なる自己の立場をのみ唯一絕對の立場となし、無の存在をも有の存在と同樣に取扱はんとする一層根柢的なる學の存在を拒否せんとするが如きことをなすとするならば、それは單に笑ふべきことなるのみならず、許すべからざる越權であ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

り、救ひ得ざる獨斷でもあるであらう。かく自然科學的唯物論の立場にのみ蹋躇して他を顧みるに由なく、全く獨斷的信念の上に認識し、行爲をすらも敢てなさんとする者は、今日我が國にも尙ほ絕無とはいひ得ぬであらう。かくの如きに對してその蒙を啓き、その越權をたしなめ、その獨斷を覺まさんために、無の存在の存在性を顯示することは、必要不可缺のことではなからうか。

註　Bergson: L'évolution créatrice, P. 298.

（一）フォイエルバツハ「ヘーゲル哲學の批判」（岩波文庫版）五五―六〇頁。その他無についての同樣の見解は「將來の哲學の根本問題」中にもある。

（二）フォイエルバツハ「將來の哲學の根本問題」（岩波文庫版）三四頁

（三）Heidegger: Was ist Metaphysik?, S. 9.

（四）ibid., S. 27.

二

以上に論述し來つた我々の立場に於ては、無は確かに存在する或ものであり、非存在も存在たるが故にこそまさしく非存在といひ得るものであつた。否むしろそれは、存在即ち有の世界の奥柢にあつてそれに存在性を附與してゐる領域的存在ですらもあつた。全く何もないこと、虛無、a－a＝0 の意味に於ける零、ヘーゲルのいふ抽象的無、或はフオイエルバツハの考へたる――否、考へられぬとなしたる――無は、如何にしてかゝる有の根據

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

としてその底破的領域的存在たり得るであらうか。こゝに於て我々の意味してゐる無は、かくの如き抽象的意味の無ではなくして、有と矛盾對立をなして存在することを得、それ故にこそそれについて思惟も規定も言表もし得られる如き無であることが明かである。即ちそれは ein Nicht-Etwas-Sein としての無でなければならぬ。けれども無はまたまさしく非存在であつて決して存在そのものではないが故に、如何に即存在的であるとはいへ、否、即存在的であればあるほど愈々、その無の直接端的の解明は許されてあらぬが如くに思はれる。こゝに於て我々は、無を解明せねばならず、而も解明し得ぬものとしてその無を見出したといふ全くのアポリア的苦境に押し込められ終つた如くにも思はれる。

併しながら、我々は既に「すべて矛盾するものが矛盾するものゝ存在を可能ならしめる」といふ原則を不動のものとして確立して來た。この原則が右のアポリアに一道の新路を開拓せしめるのである。即ち無の存在を可能ならしめてゐるものは實に無それ自らではなくして一定の有の世界であり、謂はゞ無は有の中にのみ顯示し得るが故に、我々は無を語る時それを常に有に於てなし、謂はゞ有の中の無を、即ち有に寫し出されてゐる限りの無を語らねばならず、またそれによつて少くとも無について語ることは既に充分とせられ得るのである。こゝに於て我々の立場は、無を擔へる有をしてその無を語らしめるといふが如きものでなければならぬ、かくて我々と雖も、無そのものを直接に顯示することはせずに、むしろ、無なくしては存在し得ないところの存在者を明示することによつて、謂はゞ間接的仕方に於て無の存在を保證し、その存在性を確立せんとするのである。それは恰も

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

鏡によつて自らの姿を見る如く、または暗さを光の影に於て見出す如くにである。然らばその有によつての無の顯示とは如何なることであらうか。これを明かにする前に我々は先づ、無とは一體何であるかといふことについて一瞥して置くことをしなくてはならぬ。

無は普通には非有と同意義に用ゐられ、前述の如く哲學上甚だ重要な概念であるが、これをその意義の上から類的に分つことは困難であらう。何故ならば、分類とか綜合とかいふ如き論理的處理は、專ら有についてのみ可能である如くに思はれるからである。事實に於て悟性の領域にのみ蹋蹐たる形式論理學の立場に於ては、無はまさしく如何なる規定にも値せず、隨つてその分類などの全く無意義であるのみならず、それはまた不可能なることでもあつた。併し我々は既にかゝる一面的立場からは全く脱脚して自由のより包括的なる立場に立つが故に、無についての論究をなし、その分類をも企て得るのである。

私は今無を分類するに、以下の叙述に於て次第に明かになるであらうところの理由によつて、これを先づ抽象的無と具體的無の二となし、更にその具體的無を相對的無と絶對的無とに區別しようと思ふ。註

註　無を抽象的と具體的とに分つたことは、例へばベルグソンが無を分つに思惟されたものと、想像されたものとの二を以てせること（Bergson: L'évolution créatrice, p. 301）などに於ても看取せられるところであり、また無を相對的と絶對的とに分つことは、中世スコラ哲學に於ては普通に行はれたことである。絶對的無なる言葉はベルグソンも用ゐてゐるやうである（ibid., p. 304）が、これから次第に明かになるであらう如く、私の今の分類は、必ずしもこれらと全く同じ意味のものであるのではない。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

先づ無は、例へば前述のフォイエルバッハの考へにも見られる如く、全く何ものも存在せざること、隨つてそれについては如何なる思惟も言表も不可能であり且つ無意味なものであると考へられる。かく有とは全く無關係にそれ自身に於て何もないもの、それ故に哲學上の問題とはなり得ぬと思惟された無を、私は抽象的無と名づけて置く。これはヘーゲルの用語によれば、貧しき抽象 dürftige Abstrak ionen としての無であり、我々の立場に於ても何等の問題をも構成するに由なき無である。併し無は本來かゝるものとしてのみ呼ばれるのではない。一方無はまた、例へばハイデッガーに於ける如く、一つの或る存在として考へられ、隨つてそれについて考究も言表も可能であるとなされ得る。かゝる意味の無は、我々の立場に於ては、有の存在と同樣にその存在性或は本質性の重要視さるべきものである。かゝる無を前者に對して具體的無と名づけることゝする。そして更にかゝる問題となり得る無の中で、常に有と對立することによつて初めてその存在が確立せられ、有の矛盾者としてのみ、即ち有に相對することに於てのみその存在の考へられる如き無、例へばアリストテレスの缺如としての無の如きものを我々は相對的無と呼び、かく有と對立することなく、むしろ有そのものをそれ自らの中に包有し、即自的に純粹に存在し得る如き無、例へばプロテイノスが萬物流出の根源として考へた一者や、ヘーゲルが辯證法の始元として措定した絕對者を稱して無といひ、また老子が「天地萬物、生於有、有生於無」といへる如き場合の無を稱して、それを絕對的無と呼ばふと思ふ。

註　ヘーゲルの辯證法に於ける始元をかくの如く解することには、或は異說があるかも知れない。何故ならば、これは單

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

純な無規定性ではなくして抽象的有の一面的消極的規定或はその抽象的自覺としての無のみに過ぎないとの解釋も可能であらうからである。前述のフオイエルバツハの解釋の如きは、それの極端なものといへるであらう。かゝる意味ではヘーゲルの始元は却つて我々のいふ抽象的無により近きものとなる。併し我々はかゝる解釋によらず、その始元を以て純粋有としての純粋無と解し、而もそれは常に絶對者の自己完結體と見、相對的有無の未だ發せざる絶對的根源となし、その意味でプロテイノスの一者の如き意味のものと考へ、それ故に絶對無と呼び得らるべきものとするのである。ヘーゲル自らは、その始元を無でなく有であるとしてゐることも事實であらうが、併しその有は無を拒斥したものではなく、有無の渾然たる無規定者である。我々はその無規定性に着目して、これをより多く東洋流に解し、絶對的無と名づけて置くのである。

かくて抽象的無とは、一般に何ものも存在せぬと悟性を以て抽象的に思惟された全くの虚無であり、それからは何ものも生ずることなく、また何ものもそれへは歸入することなき零であり、而もその零は一切の内容を沒却せりといふ意味の、即ち a−a=0 の零である。隨つてそれについては考究も言表も不可能であり、全然如何なる學の對象ともなり得ぬものである。勿論それも無意味といふ意味を有つ點では、現象學などの領内には入れらるべきものであるが、その場合にはそれは無そのものとしてではなく、全く意味なきもの即ち無意味の意味として取扱はれてゐるに過ぎない。中世期に於ては四角な圓といふ如きものが絶對無として說かれてゐるが、我々はむしろベルグソン流に解してこれを抽象的無と呼ぶのである。ベルグソンによれば「あらゆる存在の絶滅といふことは、要するにかの四角な圓と同樣に、眞の觀念ではなくして單なる空語に過ぎない」[註]ものである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

註 Bergson: L'évolution créatrice, P. 304.

これに對するものとして具體的無がある。これは常にそれの存在性の問題になり得るものであり、またならねばならぬものである。幾何學上の點は極限としての零であり、その意味で無であるが、その存在は疑ひ得ぬものであり、それについての考究や言表も必須的のものである。相對的無とはかゝる具體的無の中の而も相對的のものと考へ得られ、有に對してその缺如たるが如き意味を有つ。それ故に、思惟の對象たることも可能であり、その限り一つの對象性を有つ。我々の直接に認知し得る無は、この相對的無のみであるといへる。ベルグソンが「『存在しない』もの、觀念は、『存在する』もの、觀念とそのものが積極的實在によつて除去 exclusion されたといふ觀念との結合せるものである」註といひ、「一つのものが無になるとは、實は他のものに置き換はることの意であり、一つのもの、缺如 l'absence を考へるためには必ず或る他のもの、存在を考へなくてはならない」(一)と說いて認容するところの無は、まさしくこの意味の相對的無といへるであらう。それは有がその有性を漸減して極限に達した無限小としての零と見られ、佛典に謂ふところの隣虛であつて、數學的には1/∞の記號で示すことも、できるであらう。

註 Bergson: L'évolution créatrice, P. 310.

（一）ibid., P. 307

次に絕對的無は、實は無とも有とも一義的には規定し得られない如き絕對者であつて、謂はゞ相對的有無を超

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

越してそれ自體に於て存在する純粋の無規定者である。それ故にこれは例へばヘーゲルに於てしか呼ばれてゐる如く、純粋無 reines Nichts とも呼ばれ得るものであり、或はむしろ却つて純粋有 reines Sein とさへも呼ばれ得る如きものである。即ち有にして無、無にして有たる無規定者であり、「それ自らのうちに有を包含する無であると共に、またそれ自らのうちに無を包含する有である」[註] ところの具體的現實者である。道元などが、佛性は無にして一切の存在に於て自己を現はすといふ時の無は、かくの如きものと解釋せられ、西田哲學が、人格界を無の一般者の世界として意味づける時、その無もやはりかくの如き無規定的絶對者でなければならぬであらう。すべてのものはかゝる無にその生成の根源を有つと共に、それはまた究極に於てかゝる無に歸入せねばならぬものである。尚ほ數學的にこれを示すならば、或は $\frac{0}{0}$ を以て示すべきでもあらう。$\frac{0}{0}$ は不定數を示すものであり、それは如何なる數を以ても充たさるべき性質のものであるが故に、そこに何等か任意の內容を以て充たさるべきあらゆる期待を含んだ未規定者と解し得られるが故である。ベルグソンは「かゝる無の觀念は決して有に對立してゐる無、または有の前に存在してその根柢をなしてゐる無ではなくして、一般に存在を包含してゐる renfermer 無といはねばならぬ」(一) となしてこれが認容を拒むのであるが、併し彼が認容を拒むのはそれを無と呼ぶことであつて、それの存在の可能であることではない。我々はかくの如き無規定的絶對者を究極的なものとして認容すると共に、而も例へばまたプロティノスなどの用語に倣つて、これを最も深き意味に於て無と呼ばんとするのである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

註　Hegel: Encyclopädie, §. 89.

（一）Bergson: L'évolution créatrice, P. 303.

以上の如き無の分類に於ては、抽象的無は全く形式論理學的に考へられた無であり、具體的無は辯證法的に考へられた無であるといへる。そして更に相對的無は存在論的に考へられた無であり、絶對的無は即存在的なる一の神祕的宗教的直觀によつて認得せられた無であるともいへるであらう。「無からは無が生ずる」ex nihilo nihil fit といふ時、即ち無からは有たる何ものも生ぜぬといふ時、その無は抽象的無を意味するものでなければならぬ。併し「無から存在者としてのすべての存在が生ずる」ex nihilo omne ens qua ens fit といふ時、その無は相對的無を意味するものである。そして更に「無から被創造物が生ずる」ex nihils fit ens creatum といふ時、それは絶對的無を意味するものである。我々はこゝに以上の中の相對的無を先づ問題となし、次に究極に於て絶對的無の存在を認容し、かくすることよつて更に抽象的無に對してもそれ相應の意味、即ちそれは全く意味なき抽象概念としての無であつて、實は我々の意味する無の範圍からは除外されねばならぬといふその意味を附與せんとするものである。

無は以上の如く三分して考へられるが故に、無に關する限りの學說はその中の何れを主として論ずるかに隨つて、これを三つに分類して考察することができよう。即ち一は抽象的無のみを問題とするもの、隨つて無は存在もし得ず、考へられもし得ぬとするもので、例へば古くはパルメニデス、ゴルギアス、近世に於てはフオイエル

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

バツハなどの說がこれに當るであらう。二は相對的無を主張するもの、即ち無は有と共に存在し且つ學の對象ともなり得るとするもので、例へばデモクリトス、プラトン、現代に於てはベルグソンなどの說がこれに當ると思はれる。現實性の缺如者、即ち可能的存在を以て無と見做すアリストテレスの說も、これに屬するといへるであらう。無を相關概念 Relationsbegriff となせるショウペンハウエルなどの立場も、これに屬するといへる。三は絕對的無にその主張の中心を置くもので、これに屬するものとしては古くはプロテイノス、近くはヘーゲル、現代に於てはハイデッガー、西田哲學などを擧げることができよう。カントは周知の如く無について四つの區別をなし、(一)對象なき空虛な概念としての無即ち思惟的存在、(二)概念の空虛な對象としての無即ち缺性的無、(三)對象なき空虛な直觀としての無即ち構想的實在、(四)概念なき空虛な對象としての無即ち否定的無を擧げ、第一の思惟物と第四の不合理物とは共に可能的たり得ぬ全くの空虛な概念としてこれを斥け、第二の缺性的無と第三の構想的存在は概念に對する空虛な與件であるとしてこれが可能性を認めてゐるが、これは以上の中の相對的無主張の立場と見ることができる。勿論以上の三つの立場の學說は、それぞれその立場のみを固守して他を顧みないといふ如きものではない。例へばアリストテレスの如き主として相對的無としての可能性を說きながら尙ほ絕對的無と解され得る太源 τὸ ἄπειρον を認容して居り、またヘーゲルの如き即自的な絕對的無を認めると共に對自的な相對的無を說いてゐると思はれるのである

併しこれらに關する詳述は固より只今の携はり得る仕事ではない。今は只無に關する主なる學說についてその

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

歴史的一瞥をなし、その上に直ちに無そのものゝ存在性についての解明をなさんと試み得るだけである。

三

さて無が少くとも學的關心の對象となり、哲學的に問題となる以上、それは必ず上述の三種の中何れかでなければならぬ。ギリシヤ哲學の始祖タレスに於ては、哲學問題は專ら自然 φύσις のみに係り、その自然はたとひ一つの存在として問題とはせられたが、併し未だ眞の意味での存在 ὄν そのものは問題とはならなかつたかに見える。隨つてまた當然非有 μὴ ὄν 即ち無も彼に於ては未だ問題ではなかつた。自然は彼に於て水を意味したが、その後アナクシマンドロスはタレスの水に換へるに無限者 τὸ ἄπειρον を以てした。これは不死不變の無限なる質料であり、一切の事物の生成し來る源であると共に、またそれらの必然的に歸りゆかねばならぬ歸着地なりとされた。かくてこの無限者が、存在する究極の存在者とされるが故に、これに對立する有限者 τὸ πέρας は無の意味を有つものとされた。これが後にギリシヤ哲學に於ける非有即ち無の源泉をなしたものといはれる。併しながら、無への進展の源泉をなしたものはこの有限者のみではないであらう。後世に於いて特に重要なものとなり來つた我々の所謂絶對的無の源泉は、この有限者にはなくして、むしろ無限者の方にあつたといはねばならぬ。このこと例へばプロテイノスの一者が無と呼ばれる所以を想起することによつても充分に明かにされることであらう。

ギリシヤ哲學に於て、存在を隨つてまた非存在を眞に存在論的に問題にしたものは、普通にいはれてゐる如

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

く、エレア學派の祖パルメニデスであらう。併し彼の問題とせるものは我々の所謂抽象的無のみであり、隨つて實は彼に於ては非存在即ち無は存在せぬもの、考へられぬもの、隨つて全く學問的研究の對象とはなり得ぬものとして取り扱はれた。パルメニデスの學說の根柢をなすものは「有は存在する、併し非有は存在しない」註といふのであつた。「何故なれば非有を汝は知ることもできず（といふのは不可能であるが故に）また話すこともできないから。」註「考へることゝ有ることゝは同一である」註といふ彼の立場に於ては、知ることも話すこともできぬものは存在せぬものであつた。存在するものは有であるが故に、その矛盾者たる非有即ち無は存在し得る理なく、隨つて固より思惟し得られぬものである。何故ならば、思惟し得られるものは存在するものでもあり、隨つてそれは有だからである。有のみが常に存在し、而もそれは嘗て在りしものでも將來在るべきものでもなく、今現にさうして常にいつでも存在するものである。嘗て在りしものや將來在るべきものは在るものではない。それ故に有は無始無終であり、不變恒常である。それが無より生じたり、また無にまで消えたりすることはあり得ない。即ち無は如何なる意味に於ても考へることができず、隨つてそれはまた絶對に存在することのできぬものである。これパルメニデスの說は抽象的無のみの主張であるといはれる所以、ヘーゲルがパルメニデスの有を自らの有と區別してそこに辯證法的契機を否認したのも、それはそれと聯關せるその無が全く抽象的のものでヘーゲル自らの無とは異ることを示したものといへるであらう。かゝる抽象的無のみを問題とせりと思はれるものに、その後エムペドクレスやアナクサゴラスなどがある。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

註 Parmenides: Fragmente, 6, 4, 5.

これに反して、相對的無のみを認めてこれを强調したと思はれるものがアトム論者であり、その中でも殊にデモクリトスである。彼がその師ロイキツポスの說を繼いで大成したアトム論は、實在するものと空虛なるものとを齊しく存在するものとしてこれを認容する學的根據の上に初めて可能にされるものであつた。何故ならば、アトムが存在し且つ運動し得るためには必ず一定の空間の存在を豫想せねばならぬからである。こゝに於て「有の存在することは非有の存在することよりも優ることがない」[註]といふことがその中心思想となる。即ち有と非有とは共に平等にその存在性が保證せられ、有の存在は非有の存在によつて、また非有の存在は有の存在によつて確實なものとなる。かくてこゝでは無も亦一種の存在として取扱はれ、有と齊しく學的研究の對象とせられ得る。アナキシマンドロスの限界あるもの τὸ πέρας がこゝではその限界なきもの τὸ ἄπειρον と同樣に存在の權利を有つものとなる。かくて彼は相對的無の支持者といふことができる。

註 Demokritos: Fragmente, 156.

以上の如きパルメニデスとデモクリトスとの對立に類するものは、稍々降つてゴルギアスとプラトンに於ても認め得られる。ゴルギアスは彼の有名な三否定に徵しても明かである如く、有の存在の絕對的否定者であるが、有の存在の絕對的否定は、また同時に無の存在の絕對的否認を意味するものでなければならぬ。無の存在の否認とは併し、抽象的無の是認に外ならなかつた。これに對しプラトンは形相的イデアの世界を認めてこれを有とな

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

し、眞にあるもの ὄντως ὄν として何ものにも優るその存在性の確實を主張した。併し單にそれのみに止らず、それに對立せる非有として質料的なるものゝ存在をも認めるのである。彼によれば、個々の事物が只イデアの覺束なき影を宿すに過ぎぬ所以は、その質料的なる非有の存在によつて妨げられるからである。即ち個物界の形相としてのイデア即ち有と、質料としての非有即ち無との結合に外ならぬ。かく有に對する無を認むる點に於て、彼は相對的無の是認者であるといふことができる。

併しながら、有と無とはプラトンに於ても未だ眞に同等にその存在性が保證せられ主張せられたとは見ることができぬ。何故ならば、イデアは質料に比して遙かにも增してその存在性の強く主張せらるべきものであつたからである。即ち無の存在は否認せられなかつたが、有の存在ほどに積極的にその存在性は主張せられなかつたのである。こゝに於て、眞の意味に於て無の存在を有の存在と同樣に認め、この二つの存在の存在性を同等に確保したものとして、我々はアリストテレスの學說を擧げなければならぬ。こゝに於ては、形相が質料に比して遙かにも優れてその存在性が強く主張されるなどのことなく、形相はむしろ質料の存在によつて存在すること、恰も質料が形相との結合に於て初めて存在することゝ異るところがない。即ちプラトンに於ては、イデアは質料を離れてもそれ自體に於て存在し得るものであつたが、アリストテレスに於ては、質料が形相を離れて存在し得ぬと同樣に、形相も亦質料を離れては存在し得ぬものである。かくて有は無の存在によつて、そしてまた無は有の存在によつて存在することができる。即ちアリストテレスも相對的無の主張者と見ることができる。このことは、彼が

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

無を以て有の缺如的存在と見なしたことなどからも明かにせられることであらう。

かくアリストテレスに於ても亦無は我々の意味する相對的無であつた。即ちその限り、我々の意味する最も根源的なる謂はゞ有をも無をも超越せるが如き絶對的無の思想は、彼に於ても未だ明かには說かれてゐなかつたやうに思はれる。即ち無は有に相對するものであり、その限りに於て存在するものである、有を自らの中に包含し、それ故にこそ存在し得るところの無は、たとひ彼の太源 τὸ ἄπειρον の思想に確て確かに考へられてゐるとはいへ、尙ほ未だ蔭に潛んでゐて、それが無として强く表面に現はれてゐないやうに考へられる。然るに我々の立場は、第一に相對的無を認めると共に、究極に於ては絶對的無の存在を確立し、やがては抽象的無に對してもその有つべき地位を保たしめんとするにあつた。こゝに於て我々は、我々の思索の道程への一契機となさんがために、アリトテレスに於ては未だ明かには現はれざるその絶對無の存在を何より重んじてこれを明かにせる如き學說を一瞥するの必要に迫られる。その學說を然らば我々は何處に見出し得るであらうか。それを我々はギリシヤ哲學の完成者といはれるプロテイノス、カント哲學の結實者と呼ばれるヘーゲル、及び現代に於て最も attractive な哲學とされるハイデツガーの說に於て見出し得ると思ふのである。こゝに於て我々は、更にアリストテレスの無について檢覈することより進んで、これらの人々の思想に現はれたる無について一瞥することをしなくてはならぬ。

さて、アリストテレスに於て無は何もないことではなくして、有の缺如せる一の消極的狀態としてまさしく存

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

在するものであつた。我々はこゝにパルメニデスの無とは反對なる意味の無を發見することができる。即ちアリストテレスに於て無は相對的無であり、無として存在するものである。即ち非存在も亦非存在である τὸ μὴ ὂν[註] のであつて、存在でないものとして存在するのである。即ちそれは、有に對立して存在するところの無である。然らばその無とは何か。アリストテレスは非存在に三つの意味の存することを述べてゐるが、その三つとは如何なるものであらうか。「併し存在と非存在については、一方範疇の形式に關して語られ、他方これらのものゝ可能性や現實性或はその反對のものに關して語られる。けれどもまた他方〔最も根源的なる意味での存在は〕眞なるものか僞なるものかである。」(一)といふ言葉に於ても明かなる如く、存在に對する非存在は、第一に範疇について、第二に現實性に對する可能性について、さうして第三に眞理に對する虛僞についていはれてゐる。尙ほこのことは次の言葉によつて一層明かである。「非存在は併し、範疇の存在する限りの種々の個々の場合に語られるが、その外に非存在は虛僞なるものとしても語られ、可能性についても語られる。」(二)これらによつても明瞭である如く、アリストテレスによつて意味される非存在は、(一)範疇の存在する限りの個々の場合に於けるもの τὸ κατὰ τὰς πτώσεις ἑκάστας τοῦ κατηγορεῖσθαι 例へば人間でないところのもの、白くないものなどであり、(二)虛僞としてのもの τὸ ὡς ψεῦδος 例へば誤れる命題の如き、(三)可能に於けるもの τὸ κατὰ δύναμιν 例へば人間でなくも可能的に人間であるものなどである。

註 Aristoteles: Metaphysics, 1003b10.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

（一）ibid., 1051a 31—1051b2.

（二）ibid., 1039a 26—28.

然らばこれら三つの意味に於てその何れがアリストテレスに於ける眞の意味の非存在であらうか。それはいふまでもなく可能性としてのそれであらう。何故ならば後にも述べる如く、生成 ἡ γένεσις がアリストテレスに於ける中心的概念であり、而もその生成は消極的なものから積極的なものへの變化に外ならず、隨つてそれは非存在から出發して存在にまで到達することであり、そしてその生成が如何なる種類の非存在から出發するかといふとき、そこに「もし或ものがあるとすればそれは可能的なものだ」[(一)]からである。即ちアリストテレスの非存在は全くの空虛即ち抽象的無ではなくして、むしろ可能的存在であり、單に現實性でないといふ點で、即ち存在性を缺如してゐるといふ點で無といはれるものである。この意味で、今もし存在を形相とすれば、非存在は質料ともいへるであらう。何故ならば、質料は形相たらんとしてゐる可能性であり、それが現實性となるときに形相となると見らるからである。資料は明かに形相に對するものであり、またその限りに於て質料たるものである。隨つてまた可能性は現實性に對し、そしてその限りに於て可能性たるものであり、同樣に非存在は存在に對し、而もその限りに於て非存在たるものである。かく有に對してのみ無は無として存在するが故に、アリストテレスの無は明かに我々の所謂相對的無に當るものと見ることができる。このことは尙ほアリストテレスの缺如の思想がよくこれを現はしてゐる。何故ならば非存在は存在性の缺如せる或ものに過ぎぬからである。隨つて彼に於ては

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

例へば偶然的なるものは存在ではなくしてむしろ非存在に近いものである。(二)

註　Aristo'eles: Metaphysics, 1067b21f.

(一) ibid., 1069b28.

(二) ibid., 1026b2f.

然らばアリストテレスに於て我々の意味する絶對的無に當るものはいづこに考へられてゐるであらうか。それは彼が所謂究極者即ち太源 ἀρχέτυπον と名づけてゐるものゝ中に見出し得られると思ふ。勿論これを彼が無と呼んでゐるといふのではない。それはむしろ、他の何ものについても述語として述べられることなき究極的基體 ὑποκείμενον ἔσχατον といふ意味では實體 οὐσία とも味はるべきものであり、それによつて事物が存在し、或は生成し、或は認識されるに至るその當のものといふ意味では始源 ἀρχή とも名づけらるべきものである。併し如何なる言葉を以ても規定し得ざるもの、即ち無規定者たるの意味で、それはヘーゲルなどの用語法に於ては、無と呼ばれるに充分なものであらう。即ちアリストテレスに於ても究極的なものは始源者であり、且つそれは定義できぬものであつた。定義を表示する概念は或ものについて或ものを述べるのであつて、その場合一方は質料の位置にあり、他方は形相の位置にあるものでなければならぬが、究極的太源はかゝるものに分ち得ないからである。(一) 究極者はまた何等相反するところのものを有ち得ないものである。反對的對立をなすものはすべて質料を有つものであり、可能的に同一のものであるが、究極者は質料を有つことがないからである。かく質料なく形相なく、

註

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

且つ概念的に規定し得られぬものとすれば、それは絶對的無の名によつて正當にも呼ばれ得るものでなければならぬ。尤も、アリストテレスの形而上學に於てこれらのことは明瞭には語られてゐないやうに思はれる。

註　Aristoteles: Metaphysics, 1043b 30—32.

（一）ibid., 1075b25.

このτὸ πρῶτονは、プロテイノスの一者τὸ ἓνとなるに至つて、初めて明かに絶對的無としての意味を有つものとなる。勿論彼も亦それを明かに絶對無と呼んでゐるのではない。むしろ一切の光を放射する太陽の如きものとして說いてゐる。隨つてそれは無といふよりは却つて絶對的なる有と呼びなす方が、より妥當的であるであらう。併しそれは實は有とも無とも一義的には規定し得ないところの、そしてあらゆる存在、存在の一切を生み成す絶對者であるが故に、我々の所謂絶對的無に相當するものであることを思ふのである。プロテイノスによれば、すべてのものゝ存在は、この一者によつて直接にその存在性を附與されることによつてのみ、初めて存在し得るものである。それ故に、一者は此のもの彼のものといふが如き個々の相對的存在ではなく、それらの存在の一切を超越し、その根據的存在として存在するところの或ものである。かく一切を超越するものであるが故に、勿論それは一定の形相を有つものではなく、また定まつた形態を具備してゐるものでもない。それは全く無形相であり、無形態である。そして實はそれ故にこそよく一切を超越すると共に、またよく一切の存在をして存在たらしめ得るものである。かくて一者はすべての存在の根源であり、それ故にこそ太源τὸ πρῶτονと呼ばれるので

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ある。かくの如く、それ自ら自已を限定することによつて初めて他の一切の存在を可能ならしめる當のものであるが故に、一者それ自身は他の如何なる存在によつても限定せられることなく、隨つてまたそれは如何なる屬性をも有つことなき絶對者でなければならぬ。故にそれは實は存在するとも存在しないともいひ得ぬものでさへある。かく有無の對立をも超越しつくせるところの或る絶對者である。隨つてそれは我々の理解を超越したところの、謂はゞ有限的なる我々の思惟によつては遂に理解し能はぬところの、神とも呼ばるべきものである。神はそれ自身無であるが故によく萬物を自らの裡に映寫することができる。萬物は神の中に自已の姿を寫すことによつてよく自ら存在者たることができるのである。かくて神は一切を寫す鏡とも見ることができる。即ちカミはカガミである。鏡がすべてを寫し得る所以はそれ自ら無たるの性質を有つからである。かくてプロテイノスの一者はかくの如き鏡にも比すべき絶對的無であるといひ得られるのである。

併しプロテイノスに於てはかゝる絶對的無の外に今一つ無的意味のものが考へられる。即ちそれは一者とは正反對の地位にある物的なるものである。萬物は究極絶對の一者より流出し來ること恰も光が太陽より流出し來る如くであるが、その光は太陽から遠ざかるに從つて次第に薄らぎゆくやうに、萬物も一者を遠ざかるにつれて漸次その完全性を減じ、そして最も遠き、謂はゞ最下の段階に到達せる存在はその完全性即ち存在性の全き缺如の故に、恰も光の全き缺如が闇と呼ばれる如く、それはまた無と呼びなさるべきものである。かくの如き意味の無は、すべて或る形相と結合することによつて初めて具體的存在者たり得るところの質料の如きものであり、一切

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の生成を成立せしめる感性的基體ともいはるべきものである。隨つてそれは、例へばパルメニデスの無の如く、單に抽象的に考へられたる空虛ではなくして、むしろアリストテレスの可能的存在が現實性の缺如の故に無的性質のものであると解された場合の無の如きものであるであらう。それは一者に相對して獨立に存在するものではなく、全く消極的であり非有である。かく、それ自らは無でありながら而も單に存在性の缺如者といふだけで、やはり存在者たることには變りなく、萬物が一者から流出されるために必要な可能的條件とも見らるべきものである。この意味でこれを相對的無と呼んでも差支へないであらうと思ふ。かく考へる時プロテイノスに於ては二つの無即ち絶對的無と相對的無とが考へられ、それらの無の間に理性 νοῦς や靈魂 ψυχή などの所謂存在の世界が介在してゐるやうに思はれる。隨つてこれらが無に對する有の世界を構成してゐるものと考へられる。かくの如く考へ來る時、プロテイノスの二つの無は何れも有に對して存在するものであり、一は有を生む積極的能動としての無であり、他は消極的所動としての謂はゞそれによつて有のつくりなされる質料としての無である如くに思はれる。何故なれば我々のいふ絶對的無は一切の非存在は勿論すべての存在をすらも打つて一丸とせるが如き包括的統一の究極的絶對者であり、それ故に實は有とも無とも一義的には規定し得ざる如きものとして存するものだからである。併しプロテイノスの一者と雖も物的なるものに相對すると考へられた時には、或は所動に對する能動、消極に對する積極とも考へられ得ようが、一者自體は、獨立に、所動とも能動とも、また積極とも消極とも規定せられぬ、むしろそれらを超越した絶對者と見られねばならぬ。何故ならば、一切の對立を絶した存在であ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

るが故にこそ、絶對的無なる名にも値し得たものだからである。こゝにまたそれが一義的に規定し得られず、隨つて單に宗教的體驗によつてのみその存在性の確證される神の如きものである所以もあるであらう。

かくてプロテイノスの一者は多者に對立せる一者ではなく、むしろ一・多を統一して存在する絶對不可分の全體者である。そこに一切の對立が許されないといふのも、對立はもともと二であり、二は多であるに外ならぬからである。それ故に一者は、所動・能動、消極・積極、靜・動などの對立一切を超越し、而もこれらのすべてを打つて一丸とせる如きものでなければならぬ。隨つてそれはまた主觀・客觀を超越し、それ故にまた超意識的である。意識するものでも意識されるものでもない。自己意識をすらもそれは超越する。何故ならば自己意識は自己反省であり、自己反省は二であつて一ではないからである。かくてそれはまた、善惡、美醜、眞僞などの一切の價値的對立を超越する。それ自身善者 ὁ ἀγαθός と呼ばれることあるも、それは惡に對立せる意味の善ではない。存在するものは皆善であるといふが如きアウグステイヌス的意味の善である。かく、一切の對立を絶したものとせば、その一者は抑々如何にして我々の認識領内に入り來り得るであらうか。

一者の存在の確證は宗教的體驗によつて最も明かにされるとするが、併しプロテイノスはまた一方それは理論的思辨によつて可能でなければならぬことを論證しようとする。即ち我々の日常經驗が多の世界であるが故に、それの統一者として一者が存在せねばならぬとするのである。こゝに於て明かなることは、プロテイノスの一者も、その存在が理論的に考へられた限りに於ては、やはり多の統一としての一であり、多に對立する一として初

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

めてその存在性が明かにせられるといふことである。併しそれが理論的にかく思惟されねばならぬからとて直ちにそのやうにそれが存在してゐるとは限らない。一者の一者たる所以は一・多統一の絶對者たるところにあるが故に、その存在は遂に理論のみを以てしては明かにせられぬものであるといはなければならぬ。即ちそれは宗教的體驗の對象たる神の如きものとして最も明かに我々の前に現はれる。隨つて相對的世界の存在を有として性質づける我々にとつて、一者はまさしく無たるの意味を有つ。一切の相對者を流出せしむる流源としての絶對的無、それがプロティヌスの一者に與へられる存在性でなければならぬ。我々は次にかうした絶對的無に關係あるものとして、ヘーゲル並にハイデツガーの無について、一瞥することにしよう。

ヘーゲルに於ける無をプロテイノスの絶對者の如く解すること、否な少くともプロテイノスの絶對的無と解されるものをヘーゲルの辯證法の中心的なものとなすことには、或は多くの異論があることゝ思はれる。何となれば、その有名なる辯證法が正――反――合の三肢法によつて周く知られて居り、そしてそれが所謂有――無――成の進行であるとなされてゐるが故に、その有は常に無に對立し、無は有に對立してのみ存在し得ると解せられ、隨つて彼に於ては相對的なる有または無のみが考へ得られるやうに思はれるからである。さうしてかゝる考へは確かに正當なものと認めざるを得ない。即ち有と無とは相對立せるものであつて、兩者全く同一のものではなく、「それらが端的に異つてゐるといふこと――一方は他方のあるところのものではないといふことも亦auch」註彼に於ては正しいとせられるからである。併しながら、かく全く異別的なるものとも考へられたる相對的有と無

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

は、ヘーゲルに於ては各々それが共に抽象的であることの故に、それらは共に共通の性質を有するものであつた。さうしてその共通の性質とはまさしく無内容 Inhaltslose であり、空虚 leeres であるといふことであつた。即ち「これらの始元について知らねばならぬことは、それらがかゝる空虚なる抽象以外の何ものでもなく、有と無とのそれぞれのものは共に等しく空虚であるといふことである。」(一) かく有も無もそれが學の始めとして、或は辯證法的進行の始元として考へられた時には、共に全く空虚なる無内容者としてのみ存し得るのであるが、このことは一體何を意味してゐるのであらうか。

註 Hegel: Encyclopädie, §88.

(一) ibid., §87.

有が全く無内容であり、空虚であるといふことは、とりも直さずそれが無であることを意味してゐるのではないか。同時にまた無が全く無内容であり空虚であるといふことは、それが却つて有なる性質を有つことを意味してはゐまいか。即ち有も無もそれが相互に對立して居り、有は有であり無は無であつて、相互に差別的のみであると見られてゐる限りに於て、それは全く抽象的性質のものであり、それ故に全く空虚無内容であり、かく空虚無内容であることの故に、また實は有が無の性質を、そして無が有の性質を現はすに至らねばならぬのではないか。即ち有と無とは對立的であるが故に却つて各々他の性質を有つことゝなり、兩者合一の契機を負ひ、こゝの所謂成による兩者の止揚も必然的に可能となるのではないか。然りとするならば、有——無——成なる三肢法的

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

辯證法の進行を可能ならしめる始元としての有は、常に全く無と相對立して、對自的に分離して存在するものではなく、それはまさしく即自的に存在するものであり、さうしてその中には既に無的なるもの、それ故にこそ無への進行も可能となるところの契機が包含せられてゐるものと見なくてはならぬ。まさしくヘーゲルの有は既に見來つた如く、註それ自ら一の矛盾的存在として、自己に矛盾するものを自らの中に含有してゐるものであつた。即ちそれは有であると共に非有即ち無を自らの中に包懷してゐるものに外ならなかつた。かくてヘーゲル本來の意味に於ける有、即ち辯證法的進行の始元としての有は、實は無と外々しく對立してゐるものではなくして、それを自らの中に包有してゐるものであり、有と無とはこゝに全く同一であるとも考へられるものであつた。このことは例へば、彼がヘラクレイトスの思想を繼承發展せしめたものと正當にもいはれてゐる事實からも明かであらう。何となれば、萬物流轉を說くヘラクレイトスの思想の中には、既にパルメニデスがこれを指摘して難じてゐるといはれるやうに、(一)有と無とは全く同一のものとされたからである。かくてヘーゲルの有と無とも只單に相對立してのみ存在するのではなく、むしろ兩者互に他を包有してゐるものであり、それ故にこそ辯證法的進行をも可能ならしめるものであることが明かである。それ故に我々の今まで考へ來つた絕對的無が、ヘーゲルに於ても明かに見出されなくてはならぬ。何となれば我々の所謂絕對的無とは、相對的有無を包有すると共にまたこれを超越した當のものに外ならなかつたからである。隨つてそれはまた、或は絕對的有とも名づけられ得るものであつた。そしてヘーゲルに於てはかく呼ぶ方が至當でもあらう。彼に於て辯證法の始元をなすものは常に無では

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

なくして有であるからである。併し我々は後に述べるが如き理由に於て、(二)これを絶對的無と呼ぶのである。

註　本誌第九卷第三・四號特輯「記念論文集」四〇八頁參照

(一)　パルメニデスはその斷片六に於て、更に全く知ることなき人間ども、兩頭動物、聾者盲者の如く啞然たる者達、判斷なき群集の主張として「彼等には存在することゝ存在しないことゝが同一で而も同一でないと考へられ、萬物の道は相反對せるものであるとされる」ことを擧げ、これを批難してゐる。これは明かにヘラクレイトス一派の主張を難じたものとされる。ヘラクレイトスの斷片五一には「人は互に相離反しようとするものの合一しつゝあるを知らぬ。それはまことに弓や琴に於ける如く、反撥する力の一致である」ことが說かれてゐる。

(二)　後述四の部參照

相對的有無を自らの中に包含すると共にこれらを超越する絶對者としての性質は、ヘーゲルが辯證法の始元として措定した純粹有の中に何よりも明白であるといへる。即ち彼は純粹有について次の如く說述する「純粹有は始元をなす。何となればそれは純粹なる思想であると共にまた無規定的であつて、單純なる直接者であるからである。併し究極の始元は決して媒介されたものでもまたそれ以上に規定せられたものでもあり得ない。」註かく述べられたる純粹有は勿論全く抽象的であつて空虛であるところの有であるに外ならない。併しながら、これはそれ故にこそまた我＝我とか、絶對的無差別性とか、或はまた同一性などとして語られるところの純粹直接性であり、その限りまた我々にとつて却つて最も具體的なものですらもあり得るのである。かくてそれは、勿論直接には他の如何なるものにもそれ自體關係を有つものではないが、併し辯證法の始元であるが故に、それはやがて無

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

にまで移行せねばならぬものである。然らばそれは如何にして可能であるか。一見至難の如く見えるこの問題も、ヘーゲルに於ては何等の困難をも伴ふものではなかつた。何故ならば、純粋有はかくの如く空虛であり、無内容であつて、且つ全く無規定者であるが故に、それは直ちに無であるとされ得たからである。即ち次の如くいふ「さてこの純粋なる有は純粋抽象であり、隨つて絶對に否定的なるものである。それは同じく直接的にとれば無である。」(一)純粋者はかく無規定性であるが故にそれ自身直ちに無であり、言説すべからざるものである。その中には一切の差別性なく、直觀さるべきまたは思惟さるべき何ものもない。それ故にこそそれは無であり、無以上でも無以下でもあり得ない。無とはこの場合完全なる空虛性・無内容性・無規定性であり、自己自らに於ける無差別性である。これらの性質の故に有は無である。かくてヘーゲルに於ける辯證法の始元は存在すると共に存在せぬものであり、有であつて無たるもの、無であつて有たるもの、謂はゞ有無の無差別的に合一せるものである。かくて彼に於ては「純粋有と純粋無とは同一のものである」とされるのである。

註　Hegel: Encyclopädie, §86.

（一）ibid., §87.

「有と無とは同一であるといふこの命題は表象或は悟性によつては甚だしき逆説的命題として現はれる。そのために、それらは恐らくそれを眞面目に意味されたものとして受けとることはないであらう」註とヘーゲル自らもいふ。けれども併し、それはまさしく只表象や悟性に對しての限りに於てのみ逆説的に見えるのであつて、純粋

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

なる存在の存在性に即して觀ずる時は兩者はまさに全く同一であるところの規定を包含してゐる。このことは、例へば次の如き例に徴して自ら明白であらう。即ち、絶對的なる透明さ即ち全く純粹な光と、絶對的なる暗黑さ即ち全く純粹なる闇とは、單に表象や悟性に於て思念せられた限りに於ては全く異別的・差異的のものであるとしか思はれぬが、事實、存在そのものとしては視覺的に何も見えないといふ點で、兩者全く同一のものであるといふことである。かくて純粹な光と純粹な闇とは、二つながら共に視覺に於て全く空虛であり無である。即ち規定を受けない光即ち暗まされない光や、規定を受けない闇即ち明くされない暗さの中に於ては、すべては無差別的であり、無規定的であつて、それ故にすべては無である。隨つて無規定的なる光や闇の中には、實は明るさや暗さといふこともないわけである。それと同じく無規定的なる有無の中には有無の區別なく、隨つて有と無とが全く同一のものだり得るのである。かくてヘーゲルは「有を無から區別することは單なる臆見 die blosse Meinung である」[註] とさへもいふのである。

註 Hegel: Encyclopädie, §87, §83,

純粹なる有無の全き同一性は、一面より觀ずる時兩者の全き合一性と解し得られ、兩者の直接的合體・無差別的統一と解し得られる。隨つてこの場合當然有は有であると共に無を含み、無は無であると共に有を含むものとなる。即ち純粹有は無を包む有であり、純粹無は有を包む無である。かく無を包含する有、有を包含する無は、相對的有無の名に値ひするよりは、むしろ絶對的有無の名に値ひするもの、それ故にヘーゲルに於ける辯證法の

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

始元としての有は絶對的なる或ものであると見られなくてはならぬ。ヘーゲルは事實絶對的なるものを說明して、それは第一に、有であつてまた第二に無であるとなしてゐる。隨つてそれはまた絶對的有とも絶對的無とも稱し得られるもの、ヘーゲルの辯證法はまさしくかゝるものを始元として有ち、また有たねばならぬ。かゝるものにしてこそ初めて成にまでの進行を可能ならしめ得るからである。即ち自己矛盾者のみがよく自ら運動することができる。自ら矛盾し反對することのないものが統一される必要があるであらうか。有にして無なるもののみよく自己統一への運動をなすことができる。ヘーゲルの成はまさしくかゝる運動に外ならなかつた。即ちいふ「無はこの直接的なる自己同一者として、また逆に有があるところのものと同一である。それ故に有の眞理並びに無の眞理は兩者の統一であり、さうしてこの統一は成である」註と。かくの如く成が有無包有の絶對的なるものによつて初めて可能であるとすれば、その絶對的なるものは、例へばプロテイノスの一者の如きものとも解し得られるであらう。これ即ち我々の所謂絶對的無なるものである。勿論ヘーゲルはこれを絶對的無とはいはずして絶對的有といふでもあらう。けれども既に純粹有が純粹無である以上、絶對的有は直ちに絶對的無であらねばならぬ。何故ならばそれは兩者とも全く無媒介的なる直接者たることに於て異るところがないからである。これヘーゲルの辯證法の始元をなすものゝ中に、我々の所謂絶對的無の如きものを見出し得るとなす所以である。

註　Hegel: Encyclopädie, §88.

併しながら、かく一方有と無とが全く同一のものであり、そこに何等の差別も對立もないものとすれば、それ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

は既に無差別的統一内に存するが故にそれ以上統一される必要がなく、隨つてそれは特に成によつて止揚せられる必要もあり得ないものゝやうに思はれる。然るに對立せる有無を止揚してこれを統一にまでもたらす運動としての生成は、まさに辯證法の本質を成すものである。隨つてヘーゲルに於ける有無、即ち辯證法的動向を可能ならしめる契機としての有無は、常に成に於て止揚せられ統一される運動の擔有者として存在せねばならず、その限りに於てそれはやはり互に相對的にのみ存在するものでなければならぬ筈である。こゝに於て普通に有――無――成なる三肢法によつて考へられてゐる限りの有及び無は、やはり共々即自的存在としての同一性であるよりもむしろ對自的存在としての差別性のものでなければならぬことが明かである。何故ならば、ヘーゲルに於ても有が無によつて規定せられ、無が有によつて規定せられて、各々その有無としての存在性をかち得ることは、恰も明が暗によつて規定せられ、暗が明によつて規定せられて、初めて明たり暗たることができると同じであるとされてゐるからである。こゝに於て我々は、ヘーゲルに於ける辯證法の始元たる或ものは、實はそれ自ら絶對者たると共に相對者たるものでなければならぬことを知る。即ちその始元は先づ未だ何ものをも存在せしめず、而もそこから一切を生ぜしむべき或る絶對者であり、それ故に有と無との兩方を包含してこれを統一し、有即無、無即有たる無差別者であるけれども、次にそれはまた同時に有と無とを差別的に存在せしめるものであり、それ自ら有に對する無、無に對する有、隨つて未だ統一せられず、これから統一せられんとするところの相對者でもあるのである。かくて我々はヘーゲルに於てもまさしく、二つの有或は無を區別せねばならぬことの理を明白に

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

知り得るのである。即ちその一は有無共に一體であり、有とも無とも一義的には決定し得られぬが故にそれはまた有とも無ともいはれ得るところの絶對的有或は無であり、他の一は常に有または無に對してゐる相對的無または有である。ヘーゲルが維粹有は純粹無と同一であるといふ時、それは絶對的有無を意味するものでなければならず、また有と無とは差別的でなければならぬといふ時、それは相對的有無を意味するものでなければならぬ。さうして今この絶對的有無、即ち實は有とも無とも命名し難き絶對者を以つて辯證法の始元と考へる時、普通認められる有――無――成なる三肢法は、實は絶對者――相對的有無――成なる三肢法にまで改められねばならぬことゝなる。即ち辯證法は有から無、無から成へと進むものではなくして、絶對者が自己分裂によつて相對的有無を生じ、それが再び成に於て統一せられるといふ構造を現はすものとなる。然るに我々は今までかゝる絶對者が實は無形にして無内容なる無規定者であることの故にそれを絶對的無と名づけ來つたのである。隨つて我々の解する限りの辯證法は、絶對的無が自己を分裂して再びそれを統一しゆく過程と見ることができる。かくて辯證法の始元たるものは即自的存在としての絶對的無であり、次に來るべき相對的有無はこの絶對的無の自己分裂に外ならぬ。即ち對自的存在は即自的存在が自己の中に自己を對立せしめたものである。隨つて絶對的無より相對的有無に移行することは、絶對的無が自らに對立して他者となれる自己を自ら自己に對立せしめることに外ならぬことゝなる。然るに普通の意味での存在・非存在は相對的有無の世界をいふに外ならぬ。こゝに於て絶對的無――相對的有無――成なる三肢法は當然無――有――成なる三肢法となると考へられる。かくの如く見來る時、

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

普通考へられてゐる有――無――成なる辨證法の根抵深きところに無――有――成なる辯證法がなければならぬことが明かである。かくて生成は絶對的無の自己實現であり、それと同時に相對的有の自己完成である。その場合相對的無は只これらの實現や完成を動機づけるための媒介者たるに過ぎぬものとなる。以上の如く解し來る時、ヘーゲルの辯證法の始元の中に、プロテイノスの一者的なるものを正當にも見出し得るであらうと思ふ。尤もかゝる絶對的無の辯證法的開展が忠實なるヘーゲル解釋そのものから直ちに導き出され得るか否かについては或は疑問があるかも知れない。けれども、ヘーゲルに於ける辯證法の始元が自己完結者としての絶對者若しくは具體的全體としての直接者であると解せられ、辯證法的運動がその始元自らの原始分割に初まるとの解釋が可能とせられ、少くとも彼に於ては相對的有無の統一といふが如き意味よりは遙かに超えて深遠なる或ものの存在することが認め得られ、その學說が單なる思辨的存在の辯證法の範圍にのみは限局せられてあらぬことを思ふ時、我々は以上の如き解釋も許さるべき一つとして充分に是認し得られるであらうことを信ずるものである。

さて然らば、その相對的有無の統一としての成はヘーゲルに於て如何なるものであつたか。「成は有と無との統一として、有と無との結果の眞實に表現せられたものである」[註]ことはいふまでもないが、その限りに於てそれは相對的有でも相對的無でもなくして、それらの對立を全く消失せしめたる無規定者であり、それ故に概念的には把捉し得られぬものである。即ち「成に於ては有と無と一なるものとして、また同じく無は有と一なるものとして、只消失し去るものである。成はそれ自らの中なる矛盾の故に崩壞して統一となり、その統一の中に有と無と

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の兩者が止揚せられるのである。かくして成の結果は定有 das Dasein である」[(一)]といはれる。「定有は或る規定性を有つところの有である。」[(二)]即ちそれは一定の規定性を有つことによつてそれ自ら或ものとして存在するに至つたものであり、有より無へ、無より有への生成の結果生じ來つたものである。即ちこの結果としての定有は、「生成がその一つの契機たる、存在の形式の中に措定されたものである。」[(一)]それ故に定有とは無をその中に一つの契機として隱し有つ有であるともいへる。無を有てる有は完全にして全面的なる有とはいひ得ない。かくて「定有は一面的にして且つ有限的である。」[註]隨つて有無の對立はその統一の中に明かに措定はせられてゐないとしても、即自的には包含せられてゐるのである。かくて定有も亦ひそやかなる無の所有者である。その定有が世界に於けるあらゆる個々の實在を形成する。それ故にこそ天にも地にも有と無との兩者を含まぬものはないといはれ得るのである。こゝに於て定有はそれ自らまた一つの矛盾者である。かゝる矛盾者を自らの成果として有つが故に成はまた常に單なる統一ではなくして、それはむしろそれ自らに於て落ち着きのないものである。落着きのないものは自己分裂の運命を擔ふものである。定有を結果せる成はかくて再び自己分裂へと出發せねばならぬ。即ちそれは新たなる辯證法進行の始元たらねばならぬのである。かくて辯證法的進行の終結たる成は、また直ちにその始元たるの運命を負ふ。かくして辯證法は無限の螺旋的循環運動であるともいはれ得るのである。

註　Hegel: Encyclopädie, §88, 41.

（一）ibid., §89.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(11) ibid., 390.

さて以上の如き我々のヘーゲル解釋は一體何のためであつたか。それは彼に於ける二つの無の姿、即ち我々の所謂相對的無と絶對的無との明かなる姿態を表明するためのものに外ならなかつた。尤もヘーゲル自身に於ては、これらの區別はその當然あるべき筈の程度には明かにされてゐなかつたやうではある。そのために彼は一方あまりに無を嚴密に有に對立せしめてゐると共に、その無をまた他方あまりに無造作に有と同一的なものとなし過ぎてゐる嫌ひにさへ陷つたかに思はれる。けれども我々の意圖は固よりかゝる點の檢覈にあるのではなくして、只專ら我々の意味づけ來つた二つの無の姿を、ヘーゲルの學說を瞥見することによつて一層明かならしめようとするところにのみあつた。そしてそれに於て我々は、ヘーゲルに於て考へられる絶對的無はあらゆる存在を存在たらしめる辯證法的進行の始元たるべきものであることを知り、それと同時にまた、この辯證法的進行の終りとしての成がそれ自ら矛盾的なる定有を結果するものとして、更に新たなる辯證法的進行の始元たるべきものであることの理を悟ることができたのである。

成がかくの如く再び、さうしてまた何時でも、辯證法の始元たり得るのは、それ自ら定有を結果するがためであつたとするならば、我々はこゝにその定有が一方個々の實在に連りを有つと共に、他方絶對的無としての性質をも自ら擔ふものであることを論結してもよいであらう。かく見來る時、我々はヘーゲルの定有 Dasein がハイデッカーの現存在 Dasein と、たとひそれは勿論同一のものではないとしても、その間に何等の關係も存し得な

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

いとすることのできぬことを考へざるを得ない。何故ならば、ハイデツガーの現存在もやはりそれ自身一つの存在者として個々の世界内屬的存在を傍に控えてゐると共に、他方、世界―内―存在として、常に無的なる世界そのものを背景として有つものであつたからである。即ちそれらは何れも、絶對的無限者としての無を背後に負ひつゝ而も相對的個々の存在を前に控えた矛盾者として、充分相似通へるところのあるものである。かくてハイデツガーの現存在は、絶對的無としての世界と相對的無と考へられる世界内屬的存在との中間的存在として、常に落ち着きなき存在者たる所以の理も明かにせられると思ふのである。（未完）